

「いくらダークネス化したお前でも
結城リトのことは譲れんな…それは私の下僕だ」

「はあ？最近出てきたキャラが何を言ってるんです？リトは私のものじゃあ」



「oooooooo」

「oooooooo」





!!

いっ

グ
グ

ア
ア

「……………」

「……………」

「こちらも始めるか……お前達分かってているな？
玉の中に入っているものは全部出せ！」

「中途半端に果てたりしたら許さんからな？」

ピョ

びび

「分かってます……が、頑張らせていただきます」

「良くも言ったな、口だけじゃないと……ろを見せてもらおう」



ん

（出だしは順調だな、このまま差をつけて……ふふ、今から結果が楽しみだ！）

「ぷはっ、なかなか濃厚な精液だないぞ、楽しくなってきたー！」

ゴキ

いっ

おっ

ド

ん



「ちよっとお、せっかくこの私が汚いおちんぼしどいてあげてるのに、これだけしか出せないとか……」

「なめてるんですか?」

「ぎ、そんな」と言われまして……」

「まったく、こんなんじや負けぢやうじやない」

せう

ズッ

ズッ

ぐゅ

ぽゅ





Poooooo

わわわ...

クッ

クッ

ドドド

「あ...あは...あは...あは...」
(カ、カミちゃんか、カ、カミちゃんか)

「ぞれっ……これならでいいですっ……?」

「はっ……ん……ん……おやあすあす、
ちんぽがあちんぽが……」

「別に良いでしょ……ん……ん……せ使つ機会なんてないんだから、
」

ん……

ん……

グッ
グッ

グッ
グッ
グッ



「ふふ、なんだあ……出そうと思えば出せるんじゃないですか？」

「わおっ、射精の瞬間、全部出ちゃったー！」

ぐわ

ぐわ

ぐわ

ぐわ



「本気で壊しちゃいますよ〜!」

「ほわやあああ〜!」

「ひいひい、わ、わかりましたあああ〜!」
「ヤミちゃんがドSすぎる……」

ゴッソ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ



「ほう、なかなかの大きさだな、毎日女の尻をおっかけているだけの「じ」はある」

「だが見てくれただけではなく、ちゃんとやる「じ」はできるんだろっとなっ」

「ふほほっ……心配後無用ですよー！私のムス「じ」はまだまだ現役、

朝は特に大変でしてな……毎朝オナーニーしてなだめてらるべからずやっ……」

「ふん、恥ずかしい奴め……いいだろっ存分に搾りとってやる、ありがたく思えよー！」



びび

ん

ふっ

ふっ

「むむむ……」
（このままではまずい、まどかが校長を確保されているなんて……）

「仕方ないですね、特別にオマンコを使わせてあげます！」

「わ、わかりました精一杯射精させていただきます！」



300

「おおおおおー！ー！やばい！とんとんとんマン！尻持ち戻すおどろー！
が、我慢なんてできるわけがない！」

「んう……」
(なかなかの量だけど、校長の射精にはぜんぜん足りてなさぞう！)

ジュ
ジュ
ジュ
ジュ
ジュ
ジュ

ス
ス
ス



「ネメシスさんー？あ、アナルにバイブが…」

くほあ

「ふふふ、狭い膣が圧迫されて更に狭くなっているぞ」

「どうだ突っ込みたくなるだろっつ？
思いつきり挿りどってやるからな」





「もっとタークネスに差をつけねば」

「げほっげほっ—いい感じだ…だがまだまだ足らん—」

ビッ

おー

ハッ

ズンズン

ハッ

「そろそろしょうな、だからワシが再登場ですッー！
足りない分を出させていただきますぞおー！」

「ネメシスちゃんの、精液まみれのオマン」に「いーいー突入ですぞおおー！」

フ
ッ

くちゅん

くっ

くっ

「いつきに奥まで飲み込まれてしまいましたぞー!!」
腸内のパイプの振動が伝わってきて奥に「ゴゴゴ」ちよいですなあ」

ゴゴゴ

「あがっー!!?おおほおおー!!」

ゴゴゴ

ゴゴゴ

ゴゴゴ

ゴゴゴ

「ゴゴゴ、ネメシスちゃんの子宮がぐいぐい吸い付いて、
このままでは全部吸い尽くされてしまっー!!」

「はあはあ……ふんふん、いい仕事だったぞ校長」

「なんなん、ほめて頂いて光栄ですなあ」

（ぐぬう、予想以上に搾り取られてしまいましたな……
これはしばらく勃ちそうにないですよ（汗））



「さあ、ラストスパートですよ、しっかりと射精してください！
あなたのちんぽをハメさせてあげてるんだからー！」

「おい！お前、ダークネスのほうの奴に遅れを取るんじゃないぞー！
もし遅れをとったらお前の玉を握りつぶしてやるからな！」



ズン

ハッ

ズン

ビク



その後も精液を搾り続けた結果...



ドブドブ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

「はあはあ……お腹精液で一杯……」

「次は、外に出さないで……」

ポ
ク

ク
ク

ク
ク



「んんんんんん、精液が出たがってNene!」

「んんんんんん、おっぱいを揉んで、おっぱいを揉んで」

アハハハ

ズンズン

んん

んん

んん



「あぶらっつー！ー！ぬけたあああ、精液一杯でできたあー！ー！」

びびっ

あー

あー

かっ

びびっ

ぐんぽ

かっ



「ふ…ふふ、どうです？ネメシス、
この量…バケツ一杯になるぐらいですよ」

「あなたにこれを「くれますかあ？」」

ガッ

フー
フー

フー
フー

レッ
レッ

ヌチ
ヌチ

ガッ
ガッ



「なるほど大したものだ…といたいだが、それは私も同じだよ」

「さっきから、子宮内の精液が栓を押し出してきているぞー」

ズ
ン
ッ

ズ
ン
ッ

ズ
ン
ッ

ズ
ン
ッ

ズ
ン
ッ

「さあ、結果を見てみましょう」

「良いだろう、これで、下僕がどちらの所有物が決着がつかない」

「で、結果が出たわけだが……まさかドローとは」

「最初から勝負しななおそうにも、男達はもう出ませんって泣いてましたし……ほんと役立たずなんだから」

「……なんだって……」



「あぐっー!?!」
(な、なんだー?! い、いきなり膣が)

ヒッッッ

あぐっ

んっ

んっ

「ひっっー!?!」
(ま、まさかリトのおちんぽに私達の子宮が反応して?)

んっ

んっ



ハッハッ

ズシッ

ズシッ

(あ、ありえない……見ただけでこんな反応するなんて)
(まるでお預けをされて涙をたらす犬みたいじゃ、オマシコからお汁が……)

ズシッズシッ

ズシッ

ズシッ

(……下僕のちんぽに吸い寄せられる……正気を保つのがやっとだ)

ズシッ

ズシッ

ズシッ

「ちゅ、レロ、はあはあ！羨すぎ…いつもよりずっと大きくなってる…」

ちゅ、ちゅ

ちゅ、ちゅ

ほー

「ちゅる。レロ。レロ。ち、近くで見れば見るほど…でもないちゃんぽだ…」

「二人とも、待ってくれ…そんなにならたらー！」





「も、もう我慢できな...」

うああ

はちまーんちまーん...

エロ

あう

エロ

「あぶ... 射精たああ、んあああ...」

「んあああ...」

くっ
くっ
くっ

くっ
くっ
くっ



「次の対決は、どちらが先に下僕の子を孕むかで勝負しようー！」

「次の対決は、どちらが早くリトの子供を妊娠するかで勝負ですー！」

ドト

ブル

ブル

ブル

「……んんんん」

くちゅっ♡

アッっ♡

「んんんん、どうだった？下僕よ、今度は我慢できなくなつたわ」

ズンズン

ズンズン

「おト、射精したいのでしよう？いいですよ、オマニコでおちんぽ汁全部飲み干してあげますから」

ん

ん

ん

ん



とっ

「ぶらぶらぶらぶらで、粘っ！っ！精液どばどば染れ出さへるんやー！」

びゅんびゅん

あーい

びゅん
びゅん
びゅん

「しゅわい量ついで、多すぎて子宮に入りきらないいいいー！」

びゅん



〜数カ月後〜

「結局、孕み対決も引き分けですか……」

「ああ……二人とも一発目で孕んだからな……」

「ダークネスよ、勝負はしばしばおあすけとじよん」

ボ
ク
ン

ゴ
ト

「ええ、1人目でだめなら2人目で勝負すればいいです、
またリトに種付けしてもらわないと♪」

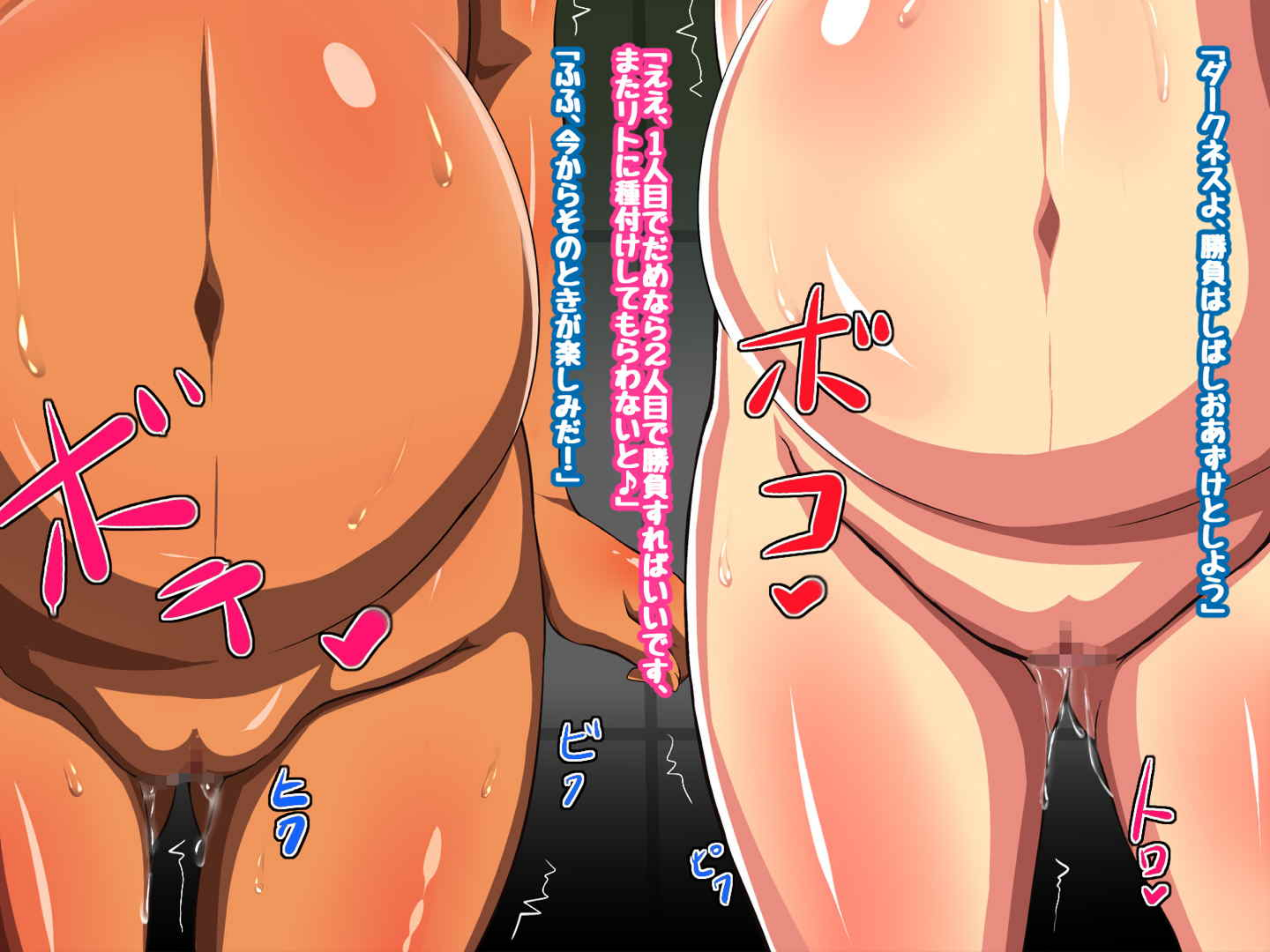
「ふふ、今からそのときが楽しみだー！」

ゴ
ク

ピ
ク

ク
ク

キ
キ
キ



END

